

美しい日本・世界を残すために！新年を迎えて！

ケナフ協議会会長・高知大学名誉教授 鮫島 一彦

新年（2017年、平成29年）を皆さまいかがお迎えでしょうか？私達の「ケナフ協議会」の目標は「ケナフ等植物資源利用による地球環境を保全する」ことです。そのために、私達はいま何をなすべきかについてみなさんと共に再度考えてみる新年にしたいと思っていますので、よろしくお願いします。

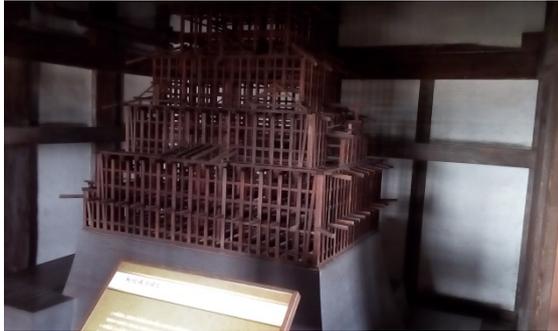
いろいろな分野で、「不確定の時代」、「混乱の時代」などと言われているようですが、どの時代でもどのような分野でも同じようなことが言われ続けて来たのではないのでしょうか。ある意味ではこれらは人類に課せられた宿命、運命でもあると考えても良いのです。「情報技術」が格段に進歩した現在でも、個人の能力には限度があり、お互いに協力しながら問題解決を図り、理解を深めることがいままで以上に大切になっていると思います。しかし、現在の世界は「分裂」、「分断」の様相を深めているようにも思います。その溝を埋めて、より良い世界を創造するため「ケナフ協議会」をさらに進歩、前進させたいと思います。



快晴の2017年1月7日（土曜日）、私は兵庫県姫路市をはじめて訪問しました。主目的は1993年に外観の「美しさ」と城としての「実用性」を兼ね備え、日本の木造建築の代表例として日本初のユネスコ世界文化遺産リストに登録された「姫路城」を見学することでした。すがすがしい冷気の中、すっきりそびえ、白く輝く天守閣を見て、別名「白鷺城」とも呼ばれる所以だなとつくづく思いました。総工費約24億円、延べ1万5千人の職人により2009年から2015年にかけて平成の大修理が行われました。姫路城に限らず、日本各地の木造建築・遺産を維持・修復するための適切な木材がいかに国内で入手できる状況を作るかが今後の重要課題だと今更ながらに思いました。われわれの美しい日本・文化は温暖多雨の世界的には恵まれた生物多様性によ

って支えられてきたと思います。

これまでの人類の知識は文字文化を中心に発展・維持されてきました。それ以前の歴史は、壁画や遺跡などで類推するしかありませんでした。しかし、現在では、文字のみでなく、映像などもビッグデータなどとして情報技術で保存でき、スマートフォンやタブレットで瞬時に情報を得られるようになりました。このことが、これまでの文字文化のみに依存した人類の生存条件を大きく変化させ、先端技術の発展とともに、世界の不安定化の要因にもなっています。ケナフ協議会もこれまでの活動に加えて、情報技術も活用しながら美しい日本・世界を次世代に残すために、発展・維持させて行きたいと思います。



**世界文化遺産姫路城を2017年1月7日に見学してきました
(鮫島一彦撮影)**

写真上頁：全景（外国の方々が多数来ていました）
写真左：城内に展示されている1/20の木造枠組み構造を示す模型（多くの国産材が使用されています）
写真下項：東大柱（多くの家族連れが訪れていました。この芯柱には次世代の子供たちもびっくりです！）
東大柱は縦 Momi の1本のもの、西大柱は檜 Hinoki の2本の接ぎ木したものです。



日本は独特の美しい景観と文化を持っています。その基盤には、美しく豊かな日本の自然環境が育てた多様なバイオマス（植物資源）の存在があります。世界の片隅で発生した人類は、それ以前に世界を覆っていた植物資源のおかげで、地球規模で移動、発展したと考えられています。しかし、かつては美しかった世界の森林は「人類の文明の発達とともに大幅に減少あるいは消滅し、後には砂漠が残った」とは良く言われることです。ケナフ協議会は発足当初から、世界の森林資源の回復を願いながら活動を続けています。日本は第二次世界大戦の戦後の荒れ果てた山々に約1000haもの植林を進めて、その森林を保全することに成功しました。それが可能であったのは、日

本の農林漁村の方々の戦後復興に対する支援と植林活動への協力、さらには、植林木が十分生育するまで、東南アジアの国々などからの木材、チップなどの森林資源を利用し、高度経済成長を達成させてもらったおかげでもあります。従って、今後、日本は、国内はもとより、世界での森林回復にさらに努力・協力する義務があるとも言えるでしょう。すでにいろいろの事業が行われていますが、われわれは、植林を進めるための第1歩として、一種のアグロフォレストリー方式で「ケナフ等の植物資源の利用による森林回復」を進め、地域の農村文化の発展、ひいては地球環境保全をいかにして成し遂げるかの道筋を示すためこれまで以上の努力をする必要があります。

日本文化は鎖国して世界から孤立していた江戸時代に花開いたと考えられています。さらに詳しくみると、独自の地方文化も花開き、これが、明治維新、戦後の高度経済成長の下地にもなったと考えられます。現在また、この地方文化の価値の見直しが始まっています。これは、世界各地の少数民族の文化が孤立状態で花開いたこととも共通する面があります。最近のオリンピックや地球環境保全のための国際会議などでは、少数民族の文化を見直そうという試みがいろいろ検討され、開会式や閉会式で彼らの文化の紹介が行われたりしています。即ち、閉鎖系での新しい資源利用システムの開発が宇宙船地球号の将来にとっては、非常に重要だと認識されるようになってきたのです。これは、人類の将来は、閉鎖系での持続的資源利用システムをいかに開発するかにかかっているということが強く認識されるようになってきたためでもあります。

昨年、2016年5月の「伊勢志摩サミット」では伊勢神宮を中心とする日本古来の地方文化が世界に紹介・発信されました。人類の将来を支える持続可能なシステム構築には伝統技術で支えられた日本の地方文化など、西欧文明とは異なるシステムを参考にしながら新しい持続可能なシステムを開発することが重要と考えられています。その方向性での具体的な方策のひとつとして、われわれの地球環境保全を目指す「ケナフ等植物資源の新しい利用体系」も考える必要があります。今年が、そのための第一歩の新年になることを願っています。

(KS170120)